

インタビュー

interview

飛鳥涼

Aska Ryo

インタビュー

interview

飛鳥涼
Asaka Ryo



〈著者紹介〉

飛鳥 涼 1958年(昭和33年)、福岡県生まれ。
1979年、シングル「ひとり咲き」でデビュー。以来、
CHAGE&ASKAを核に、ソロ・シンガーとしても3枚
のアルバムを発表、またソング・ライターとして他のアー
ティストに楽曲提供するなど、精力的な活動を続ける。



インタビュー

1996年12月6日 第1刷発行

著 者 飛鳥 涼
発行者 見城 徹

発行所 株式会社 幻冬舎
〒160 東京都新宿区四谷1-22-6

電話:03(5379)8011(編集)
03(5379)8086(営業)
振替:00120-8-767643
印刷・製本所:中央精版印刷株式会社

検印廃止

万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担でお取替致
します。小社宛にお送り下さい。本書の一部あるいは全部を
無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、
著作権の侵害となります。定価はカバーに表示してあります。

©RYO ASKA, GENTOSHA 1996
Printed in Japan
ISBN4-87728-136-3 C0095

インタビュ―

左グリップの記憶 5

鉄パイプ 11

僕にはヤクザの友達がいる 17

自動販売機 41

木 49

本読み 57

香り 63

できすぎた話 73

これも僕です 85

縁 97

インタビュー 107

分母 205

吉見さんの電話 211

左
グ
リ
ッ
プ
の
記
憶

子供の頃からの記憶が、はっきりしている。

よく、点で覚えているような話は聞くが、僕の場合は、情景も、人の台詞も、鮮やかに残っていることが人より多い。

福岡県は雑餉隈ざうしよのまで生まれ、三歳の終わりに当時の大野町（現大野城市）に越した。

雑餉隈の家は、駅から三分くらいのところにあった。いわゆる雑居型の木造二階建て、硝子ガラスの開き戸型の玄関から中に入ると、正面には二階へ上がる階段があった。ちょうど、映画『蒲田行進曲』の階段落ちのシーンで見た、主役のような顔をした階段だった。長い階段ではなく、大きな階段のイメージで心に刻まれてる。

その階段の右わきに、僕の家族の生活があった。

ふたつの小さな部屋であったが、玄関に近いほうの部屋には形ばかりのお縁があり、風呂から帰るとここで、風に吹かれるのを待った。

このお縁で花火をした。

初めての火傷^{やけど}もここで経験した。

手に持っていた細い円筒型の花火が逆流して火花を吹いた。

父は慌てて、泣き叫ぶ僕の手を水で冷やした。痛みよりも目の前で破裂した火への驚きで泣いたのを覚えている。

なぜか、痛みや苦しきだけはみんな消え去ってる。

その頃、小児喘息^{ぜんそく}を患っていた僕は、夜になるとひきつけを起こし、母の背中に抱かれ病院に行った。

ひきつけの場面になると、父ではなく母の背中が浮かぶ。そして、右へ、右へ回った。

きつと母の背中では、目を閉じたままうずくまっていたのではないだろうか。病院が、家を出て右、そして角を右に曲がったところにあつたのではないだろうか。

自衛官であつた父の演習や出張のときに限って起こる発作であつたらしい。だから、父の背中は闇夜^{やみよ}の中にはない。

大きな階段の左横に共同の炊事場があつた。

窓の向こうには畑があり、春になれば蝶々を追いかけた。

二階の人達と、よく遊んだ。遊んでもらった。

僕は、二階のおばちゃんを二階バアチャンと呼んでいた。

ある日、僕のもとに三輪車が来た。

まだまだ、車も少なかった頃、家の前で乗る三輪車は一日の遊び道具となった。

匂いも近所の光景も存在しない、一枚の写真のように残っている。

道路の右斜めの小道を入って行くと、何軒か先の左側に別のおばちゃんがいた。

遊びに行くと帰りには、ちり紙に包んだ角砂糖をいつもくれるので、母のすきについて

おばあちゃんを訪ね、丸く膨らんだちり紙をポケットに入れて帰った。

タイムマシンができないものかと、未だに密かに本気で思っている。

いちばん訪ねてみたい情景である。

記憶と、今の情景が目の前で重なることを思うと、胸がいっぱいになる。

そして、あの日の三輪車に付いていた、ハンドलगリップ。その白いゴムでできたグリップの左側がどこでなくなったか、知りたいものである。

鉄
パイ
プ

五つ、六つくらいのことである。

少しずつ、遊ぶ縄張りを広げていた頃で、毎日のように、知らない顔の人の中に混じって遊んだ。

まったく言ってもよいほど、人見知りがなかったせいでもあろう。

その日も、家の裏側に住んでる知り合ったばかりの仲間と遊んでいた。

そこは、幾つかの家がコの字型に並んで建っていたために、ちょうどよい遊び場が真ん中にできていた。

なんの遊びだったのかは定かでないが、追いかけられた僕は必死になり、目の前の木に登った。

そうすると、鬼は追いかけるのを止め、離れて行つた。

その木の上で、鬼や皆の動きを見ていたところに、大きな声で近づいてくる大人がいた。僕は、その人が自分のほうに向かつてきてることは分かったものの、怒っているなんて

思いもしなかった。

なにが起こったのか、分からなかった。

ほかの子供達は、遊びを止め呆然^{ぼうぜん}とした。

向かってきたのは、その一角に住んでいるおじいさんだった。

そのおじいさんは、大声をあげながら、足元にあった棒状のものを僕に向かって思い切り投げつけた。

それは、クルクルと回りながら、確実に飛んでくる。

身動きすることもできず、木の上で固まったまま、僕はそれが飛んでくるのを見ていた。
あー、当たるっ！

と、目を閉じた瞬間。

バサツという音がして、目の前にあった枝が折れ、棒ごと下に落ちた。

「お前か！　いつも、梅は盗^とって行きようとは。俺^とんとこの木ぞ！」

下を向くと、先程の棒状のものがなんであったか確認できた。

錆びた茶色の鉄パイプであった。